

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	井 川 純 一												
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当														
<p style="text-align: center;">論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">バーンアウト概念の再検討 —仕事への情熱の観点から—</p>															
<p>論文審査担当者</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">主 査</td> <td style="padding-right: 20px;">教 授</td> <td style="padding-right: 20px;">坂 田</td> <td>桐 子</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>岩 永</td> <td>誠</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>関 矢</td> <td>寛 史</td> </tr> </table>				主 査	教 授	坂 田	桐 子	審査委員	教 授	岩 永	誠	審査委員	教 授	関 矢	寛 史
主 査	教 授	坂 田	桐 子												
審査委員	教 授	岩 永	誠												
審査委員	教 授	関 矢	寛 史												
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>バーンアウト(burnout)とは,長期にわたり人を援助する過程で, 心的エネルギーが絶えず過度に要求された結果, 極度の身体疲労と感情の枯渇を示す症候群(Maslach & Jackson, 1981)である。バーンアウトは「対人援助職の職業病」と言われ, 多くの研究が蓄積されてきた一方, 他のストレス関連概念との違いが明確でないことなどから, 多くの批判にも晒されてきた。本論文は, バーンアウト概念を再検討することによって, 他のストレス反応と異なるバーンアウトの独自性を明らかにすることを目的とした論文である。</p> <p>本論文は7章から構成されている。第1章では, バーンアウト研究を展望し, バーンアウト概念を巡る議論を整理すると共に, バーンアウト症状の測定尺度として世界標準となっているMaslach Burnout Inventory (MBI)の問題点を指摘した。第2章(研究1)では, 医療保健専門学校(専門学校)の学生149名を対象とした調査によってバーンアウトと「うつ」とのイメージ比較を行い, バーンアウトとは「仕事への情熱」を持った結果として生じるストレス反応であるという点で, うつなど他のストレス反応と区別されることを明らかにした。第3章(研究2)では, バーンアウトの前提としての「仕事への情熱」という概念を整理するため, 看護職および営業職計300名に調査を実施し, 仕事への情熱の中核は主体的行動であることを示した。第4章(研究3)では, 「バーンアウトが仕事に情熱を持った結果生じるとすれば, 現在高バーンアウト状態にある対人援助職はその職務の一時点において必ず仕事への情熱が高かった時期がある」という仮説を, 医療従事者781名に対する調査によって検討した。その結果, MBIで測定された現在のバーンアウト傾向は, 仕事への情熱(主体的行動)と関連しておらず, 仮説は不支持となった。第5章(研究4)では, 仕事への情熱だけでなく, 情熱を傾けた結果としての報酬の程度も考慮して研究3と同様の調査を対人援助職259名に対して実施した結果, 情熱はバーンアウト傾向と関連せず, 報酬が高いほどバーンアウト傾向が低いという報酬の効果のみが示された。研究3,4の結果から, MBI得点が「仕事への情熱を持った結果としての症状」というバーンアウトの独自性を反映していないことが示唆された。第6章では, 2つの行動実験(研究5-1, 5-2)によって, 短期的状況における情熱は精神的消耗度増大の要因ではなく, 報酬のなさが精神的消耗度を増大させ, 情熱を減少させること, しかし理想・使命感が高ければ報酬の有無に関わらず情熱が持続すること, を明らかにした。第7章の総合考察では, 研究の結果</p>															

を総括し、本論文の学術的意義と課題について述べた。

本論文は、(1)バーンアウト概念は「仕事への情熱」を持った結果のストレス反応という点で他のストレス反応と区別されること、(2)しかし現在最も広く用いられているバーンアウト尺度 (MBI) は、その得点が「仕事への情熱」ではなく「報酬の欠如」と関連しており、概念の独自性を反映していないこと、(3)典型的なバーンアウトは「報酬が得られない可能性について認識しつつも理想・使命感をもっているため主体的行動を繰り返し、結果として精神的消耗が蓄積した状態」であることを明らかにし、近年のバーンアウト概念の濫用に実証的な裏付けをもって警鐘を鳴らした学術的貢献度の高い論文である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (学術) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500 字以内とする。